

現象学的心理学 への招待

理論から具体的技法まで

Phenomenological Psychology
Theory, Research, and Method

ダレン・ランゲドリッジ

田中彰吾・渡辺恒夫・植田嘉好子 訳

他者の「生きられた経験」は、
いかにして理解可能か？
「語り」を超えて、
経験の本質と可能性をいかに捉えるか？

新曜社

現象学の基本概念をわかりやすく概説した上で、主要な3つの現象学的心理学であるフッサールに基づくジオルジの記述的アプローチ、スミスの解釈的アプローチ、リクールに由来する批判的ナラティブ分析を解説。多数の研究例を紹介し、具体的な技法も懇切に示す。一冊で現象学に基づく質的心理学を一望できる待望の入門書。

現象学的心理学 への招待

理論から具体的技法まで

ダレン・ラングドリッジ

田中彰吾・渡辺恒夫・植田嘉好子 訳

新曜社

PHENOMENOLOGICAL PSYCHOLOGY

Theory, Research, and Method

by Darren Langdridge

Copyright © Pearson Education Limited 2007

This translation of PHENOMENOLOGICAL PSYCHOLOGY:

Theory, Research, and Method is

published by arrangement with Pearson Education Limited

through The English Agency (Japan) Ltd.

日本語版への序文

日本には、現象学的心理学における長く誇るべき研究の伝統があることを、私は以前から知っていました。ですが、日本にいる仲間たち——彼らは私と同様、現在もこの分野を支配している伝統的な（総じて認知的な）心理学への代案として、現象学的心理学の可能性を追求しています——と絆を深める機会を得たのはつい最近のことです。私の考えでは、現象学的方法は、好奇心をもって一緒に努力しながら、また絶えざる敬意を払いつつ、他者の世界に接近しそれを理解するうえで、最良の方法を提供してくれるものです。人間科学の大半の研究は、人間の経験を、そしてまた人間存在そのものをも単なる変数に還元してしましますが、現象学的方法はそれとは根本的に異なる立場をとるものです。本書『現象学的心理学』の日本語版に人々が触発されてさらに読書が続け、自身の研究において現象学的方法を用いることになるよう、私も大いに期待しています。

フランスの偉大な哲学者ポール・リクールは（私も本書全体を通じて彼に言及していますが）、2006年の著作『翻訳について』で優れた翻訳の重要性について述べています〔訳注：フランス語原著は「Sur la traduction」と題し2004年に出版されているが未邦訳〕。そこで彼は「言語的歓待（linguistic hospitality）」の概念について述べ、それが力のある翻訳の核心にあって、自己と他者の溝を埋める方法になっていると論じています。

翻訳者の課題を劇的なものにする葛藤に満ちた性質がそこにあるにもかかわらず、彼または彼女は、「言語的歓待」と私が好んで呼ぶものに悦びを見出すのである。その苦境は、完全には当てはまらない対応関係に由来する。……言語的歓待ははたがって、他者の言葉に住み込む行為と並んで、他者の言葉を自らの家、自らの住まいへと迎え入れる行為なのである。

この点を念頭に置きつつ、「他者」の言葉に「住み込み」それを「迎え入れる」という彼らの素晴らしい努力に関して、私は本書の訳者たち（田中彰吾博士、植田嘉好子博士、渡辺恒夫博士）に心から感謝したいと思います。特に田中彰吾氏は、私が日本を訪れた際、歓待を実践することの意義を私に向かってさ

らに示してくれました。日本文化の美しさを味わうには短すぎる機会ではありましたが、彼の付き添いで好ましい思い出になりました。最後に、この企画を信頼し、本書の出版に同意いただいたことについて、新曜社に心から感謝します。人間科学における最新の思想を日本語で出版するという野心的企画の一翼を担うことができ、非常に興奮しています。

イギリス、オープン大学教授
ダレン・ラングドリッジ

謝 辞

拙論「解釈学的現象学 ― 新たな社会心理学に向けての議論」(『心理学の歴史と哲学』第5巻1号, pp.30-45)の一部を再掲載する許可をいただいたことについて、エリザベス・バレンタインとイギリス心理学会に感謝を申し上げたい。

本書の草稿に対して大変貴重な意見を与えてくれたトレヴァー・バット、リンダ・フィンレイ、マーク・バージェス、デヴィッド・ジャイルズにこの場を借りて謝意を表したい。また、理論を実践する機会を与えてくれた、オーレ・シュパーテン、オールボー大学の学生たち、ハダースフィールド大学の教員と学生、ロンドン・サウスバンク大学、「レズビアンとゲイの心理学部門パートナーシップ構築イベント3」の参加者にも、心から感謝する。オープン大学のすべての同僚たちにも、このように刺激的で知的な拠点を与えてくれたことに感謝している。そして、ピアソン・エデュケーションのモートン・ファグレヴァンドとジェイニー・ウェブには、この出版企画を信頼し、実現させてくれたことに謝意を表したい。

最後に、この企画に取り組んでいる間、愛し支え続けてくれたわが家族と友人 ― 旧きも新しきも ― に感謝の意を伝えたい。

●目 次

日本語版への序文	i
謝辞	iii
1 章 文脈の中の現象学的心理学	i
1.1 心理学における質的方法	2
1.2 現象学と現象学的心理学	5
1.3 本書の概観	6
2 章 現象学の基礎	9
2.1 現象学とは何か	12
2.2 歴 史	13
2.3 志向性	15
2.4 経験されること（ノエマ）とそれが経験される しかた（ノエシス）	17
2.5 エポケー（判断停止）	21
2.6 現象学的還元	23
2.7 想像的変更	24
2.8 本 質	25
3 章 実存主義と現象学	29
3.1 実存主義の基本	32
3.2 マルティン・ハイデガー	34
3.3 後期実存主義者たち ——サルトル、ボーヴォワール、メルロ＝ポンティ	43
3.4 サルトル、選択することと実存の虚無性	44
3.5 メルロ＝ポンティと身体的主体	47

4 章 解釈学的転回	55
4.1 ハンス＝ゲオルク・ガダマー	56
4.2 ポール・リクール	58
5 章 現象学的心理学のさまざまな領域を 区分けし概観する	75
5.1 現象学的心理学へのさまざまなアプローチ	76
5.2 研究の設計	78
5.3 標本抽出法	79
5.4 反射性	81
5.5 倫理	85
5.6 データ収集1——インタビュー	89
5.7 データ収集2——書かれたもの	103
5.8 データ収集3——他のテキスト源および観察法	107
5.9 品質——研究への体系的なアプローチをとること	109
5.10 研究結果を書くことと伝達すること	112
5.11 現象学的研究におけるコンピュータの利用	113
6 章 事象そのものへの接近——記述的現象学	117
6.1 データ収集	119
6.2 方法	120
6.3 研究結果の提示	124
6.4 記述的現象学的分析——急性感染症の経験	126
6.5 シェフィールド学派の分析	143
7 章 解釈と意味 ——IPA、解釈学的現象学、鑄型分析	149
7.1 データ収集	152
7.2 方法	153
7.3 研究結果の提示	156

7.4	IPA の実践例 ― 人間関係における不信の経験	158
7.5	解釈学的現象学	170
7.6	鋳型分析	175
8 章	生活世界を物語る ―― 批判的ナラティブ分析	181
8.1	物語ることへの関心の拡大	182
8.2	データ収集	184
8.3	方法	186
8.4	研究結果の提示	194
8.5	研究事例 ―― 親になることについて若いゲイ男性が抱く期待	197
8.6	最後に	211
9 章	鍵になる論点、論争、反論	215
9.1	既存の物の見方への挑戦	215
9.2	妥当性と現象学的研究	217
9.3	記述 対 解釈	220
9.4	ポストモダニズムと言語への転回	223
9.5	方法の成文化 ―― 多様化／統合、創造性、そして方法崇拜	230
9.6	現象学的心理学にはどんな未来があるか？	234
	『現象学的心理学への招待』 訳者解説	237
	参考文献	253
	人名索引	263
	事項索引	265

装幀＝新曜社デザイン室

1 章 文脈の中の現象学的心理学

【この章の目的】

- 質的研究において鍵となる用語を紹介する
- 現象学的心理学の基礎を説明する
- 現象学的心理学を、心理学における質的研究というより広い分野のなかに位置づける
- 本書の構造を概観する

私は大学1年次をシェフィールドで過ごしたのだが、そこでの最初の心理学の授業を今でも憶えている。私は興奮していたし不安でもあった。興奮していたのは、なんとか大学に入学できたから、不安だったのは、自分の学力が十分かどうかわからなかったからだ。講堂は大きく見え、自信に満ちた若い男女であふれていた。そして私は、吐き気まじりの嫌な感じを覚えながら、そこにいたのだ。講義はある警告から始まった。君たちが自分自身をよりよく理解しようとしてここにいるのなら間違った場所にいることになる、というのも、私たちがここにいるのは心理学という科学について学ぶためで、私たち自身について学ぶためではないからだ、という警告だった。なんてことだ。私は間違った場所にいるらしい。幸い、講義が進むと、今後の年次で扱うことになる魅力的な幅広いトピックが説明され、私は引き込まれていた。私は、科学者であること、新しい科学の研究に関わっていることを誇りに感じた。しかし、後に続く3年の課程のなかで、学問と私自身についてのこの信念に対する疑念はどんどん強まっていった。少なくともその一部は哲学を学んだことに由来するもので、人間性の心理を含め何でも良く知っていると私の主張すべてに懐疑を投げかけてくる先生たちがいた。世界が実在するとの信念から、人間について客観的知識を獲得する可能性に至るまで、私が確信していたすべてが撃沈されてしまった。結局このことが、哲学に教わりつつ「心理学する」方法——それはもちろん、人間の条件を明らかにするような心理学である——を見つける旅の始まりになった。すでにお気づきかもしれないが、こうして私は、生きられた経験を理解することに焦点を当てる現象学的心理学へと導かれたのである。

このストーリーそのものが、ちょっとした現象学的心理学の研究になっている。というのも、一人のひと（この場合は私自身）の生きられた経験を記述しているからだ。より一般的に見ても、たとえば、初めて大学に出席する経験についてつまびらかにしたものになっている。このストーリーは、本書の主題との関係で私を位置づけてくれるだけでなく、この導入部を通じて明確にしたいと思っている本書の構造と内容を告知するものにもなっている。

本書の目的は、現象学的哲学にもとづく、あるいはそれに示唆を得た、「現象学的心理学」として一般に知られている一連の質的方法について、包括的に提示することにある。と言っても、これは哲学や心理学研究における新しい方法ではない。現象学的哲学は100年以上前に姿を現し、心理学者が推進する特定の研究を形成するうえで最初に用いられたのは1960年代のことである。心理学研究への現象学的アプローチはこのときから——より広い心理学の共同体からはしばしば無視されながらも——継続してきたが、過去およそ20年間の間に、イギリス、ヨーロッパ大陸、アメリカ、オーストラリア、南アフリカにおいて急速に拡大し、より真剣に受け止められるようになった。本書はこの発展に対する応答であり、イギリスの心理学とそこで用いられている方法の観点から見たこの系列の諸方法を一冊にまとめ、提供する試みである。

1.1 心理学における質的方法

質的方法とは、現象を経験する人々にとってそれが持つ意味の観点から、現象を自然観察的に記述し、または解釈することに関わる方法である。これは、現象とそのある側面の量を計測する量的方法とは対照をなす。この分野にいる多くの者にとって、特に現象学的心理学に従事する者にとって、焦点は、経験の一定の側面を豊かに記述することである。ただし、すべての質的研究者にとってこれが真実であるわけではない。たとえば、ディスコース心理学者 (discursive psychologist) たちは、言語によって記述された経験よりも、以下のものに焦点を当てる。会話において私たちが利益を確保する方法など、談話の持つ行為への方向づけ (たとえば Edwards & Potter, 1992; Potter & Wetherell, 1987)、そして／または、談話上のリソース、言語が実際に人生を構成し、世界のなかである生き方を可能にするとともに制約するしかた (たとえば Henrique et al., 1984; Parker, 1992)。

21世紀への転換期にあって、社会心理学 (および臨床心理学、応用心理学) は、少なくともイギリス、ヨーロッパ大陸、オーストラリア、北米においては、い

まだに（圧倒的に実験系の）社会認知的観点によって支配され続けている。とはいえ、心理学理解のこうした方法が過去に挑戦を受けてこなかったわけではない（さまざまな批判の手際よい要約は Burr, 2003 を参照）。1970 年代半ばの社会心理学における「危機」以降、これらの挑戦はより活発になり、ためらいなく聞こえてくるようにもなった。質的方法は、近年心理学において人気になりつつあるが、それはある程度、心理学共同体の内部で量的方法への不満が増大しつつあることの結果なのである。近年刊行された研究方法についての書籍、学術雑誌に掲載された論文を少しでも調べれば、心理学における質的方法が重要性を増していることの証左になる。

認知的観点への批判は、心理学への認知的アプローチの核心にある实在論（私たちが研究しうる真に可知的な世界が外部に存在するという仮定）と本質主義（人々を、最終的に人々が現にそうであるところの何かにするような、本質的な所与の核が存在するという信念）への疑義を含む。さらに、多くの認知系研究者は、知識が歴史と文化によって生じてくる道筋（私たちが出来事を話したり書いたりするしかたや言語を通じて構成されること）を説明することに失敗しており、そのことが、認知的観点からもたらされた知見への相当な不信を引き起こしている。結果として、人々は、知識を創造し人間性を探求するオルタナティブな方法を求めるようになったのである。これらの質的なオルタナティブは、心理学の主張に対する歴史と文化の影響を認め、心理学について私たちが生み出している知識と主張に対して批判的（懐疑的）な立場をとる。そして、私たちがそれらの知識を間主観的に（すなわち人々の間で）言語を通じて構成するしかたを重視するのである。

質的方法を学ぼうとする多くの人々にとって最初の困難は、多岐にわたる複雑な用語の理解が必要になることだ。以下で、すべての質的方法に関連するいくつかの基本用語を解説しながら、心理学の主流派（認知的）アプローチへの批判をさらに際立たせてみよう。あらゆる研究にとって、第一の重要な組織化の原理はパラダイムである。パラダイムとは、世界を理解する原理を提供する一連の基本的な諸信念であり、それゆえ、社会科学の研究を支える基本的な原理である。概して、これらの信念は哲学的議論を経た信用すべきものであるが、究極的にはつねに議論の余地を残している（そうでなければ、存在の本性と、私たちが世界について知っていると言っているものについての哲学で進行中の論争は、ずっと昔に終結していただろう）。心理学は**実証主義**パラダイムにのっとっていた——そしてある程度は今もそうである。実証主義パラダイムとは、科学的方法（数量化や統計の使用を含む）を通じて、私たちがそれについての知識を獲得

できるような世界が実在することを信じるパラダイムである。多くの社会科学研究者にとって、**ポスト実証主義**パラダイムが実証主義に取って代わっている。そこでは、真の世界はいまだ仮定されているものの、世界についての私たちの知識は危うい（疑いうる）ものであり、そのため、完結することは決してなく、近似的なものにとどまる（Guba, 1990）。主流派の心理学研究の多くは、自然科学（化学、物理学、生物学）における大半の研究と同様に——自然科学は長らく心理学にとってのモデルであり続けてきた——**実証主義／ポスト実証主義**パラダイムの内部で機能している。実証主義／ポスト実証主義パラダイムは自然科学にとってはおそらく適切であるものの（この点でさえ近年は疑問視されているとはいえ）、心理学および人間性の研究にとっては不適切なパラダイムだと思われる。その結果、さまざまなパラダイムが心理学に流用されるのを私たちは見てきたし、そこには現象学的パラダイムの採用も含まれていた（以下を参照）。

あらゆるパラダイムは、世界についての一連の信念につながっているし、それによって、一連の用語が導かれてくる。パラダイムは、特定の**認識論**的な立場——すなわち、私たちが何かを知っていると言っているか、ということに関する私たちの立場——につながっている。認識論は、知識、私たちが世界について何を知っていると言っているか、知るものと知られるものとの関係、に関心を持つ哲学の一部門である。私たちが実在の世界を信じるなら、その世界についての真理を発見するため（または物事が現実にとどのようであるかを発見するため）、科学的認識論を採用する必要があるだろう（私たちはそこでは客観的で、〔世界から〕分離しており、没価値的である）。対照的に、現象学的パラダイムは（実在する可知の世界よりも）経験やナラティヴに認識論的な焦点を当て、主観的で〔世界と〕非分離のこれらをとらえる方法を求める。この連鎖で残る2つの輪は、ある主題について研究する一般的なやり方を意味する**方法論**と、使用される特定のテクニクとしての**方法**である。採用される方法論は、本人の認識論的な立場によって性格づけられる。そして今度は方法論が、使用される方法の種類に影響を与えることになる。実証主義的科学の方法論を承認している者は、実験のような方法を採用する傾向があり、実験は研究のプロセスから異質な要因を取り除くようデザインされる。しかし、現象学的方法論は、データ収集と分析のプロセスに研究者が与える影響を説明する必要を認識しており、経験についての自然観察的で一人称的な記述の集積をとまなう。質的な理論と方法の基礎についてのさらなる議論は、ラングドリッジ（Langdridge, 2004a）を参照。

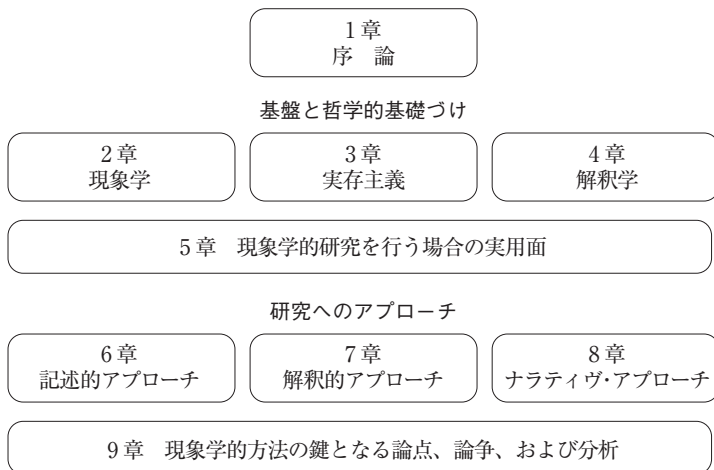
1.2 現象学と現象学的心理学

現象学的心理学に特有の焦点は、現象学的哲学の創始者エドムント・フッサールによる有名な言葉、「事象そのものへの還帰」にある。だから、現象学的哲学を心理学に応用する場合、私たちは、人々のそこで生きる世界についての知覚と、その知覚が人々にとって意味するものに——すなわち人々の生きられた経験に——焦点を定めようとする。現象学（現象学的哲学）は、1900年代初頭、ドイツの哲学者エドムント・フッサールの仕事とともに始まった哲学運動である。それは、生きられた経験の哲学を中心に据えることに関心を持ち、大胆かつ根本的に新しい方法で哲学することを告げるものだった。とはいえ、現象学は一貫した思想の体系ではないし、現象学的心理学を創造するうえで依拠しうる考え方にも、異なった示唆に富む多くのヴァリエーションがある。したがって、現象学的心理学と呼びうるひとつの何かがあるわけではない。むしろ、現象学的心理学は、さまざまな強調点を持つ現象学によって特徴づけられており、現象学的哲学の特定の流派に依拠して方法論をもっぱら形にしている、一群のアプローチに貼られたラベルとして見るべきである。

あらゆる現象学者は、実証主義と科学的プロジェクトにとって中心的な主観－客観の二元論——そこでは、実在する世界と知覚を通じて現れる世界とは分離していると見なす——に対抗する。現象学者が主張するのは、世界のなかの対象を、主観性やそれについての知覚から切り離してとらえても意味がないということである。ある対象は、私たちがそれを知覚し、意識に現前して初めて、私たちの現実に参加する。それだけでなく、知覚はとりわけ、対象との関係における知覚主体の位置、知覚主体の気分など、文脈に応じて変化する。それゆえ、真に知りうる世界についての最終的な知識は見出されることがない。その代わりに、私たちは世界についての知覚と、それがどう経験されるかに焦点を当てる。異なる人にとってそれが異なった意味を持つこと、同じ人でも異なった文脈なら異なった意味を持つことを認識してのことである。したがって、現象学的心理学の狙いは、経験を研究すること、世界が人々に対してどのように現れるかを研究することにある。この目的のため、現象学的心理学は、豊かな具体的経験の記述、そして経験のナラティブを研究者が引き出すことのできるような一連の方法を採用する。これらの方法は、研究参加者の生活世界を解明するべく、また潜在的には、類似する出来事を経験した、あるいは将来するかもしれない他の人々の生活世界、さらには研究者の生活世界をも解明するよう

に設計されている。

1.3 本書の概観



本書は、現象学的心理学の哲学的基盤のアウトラインを示す3つの章から始まる。各章では順に、現象学の基盤（2章）、現象学に続いて生じた運動で、現象学を変容させ現象学的方法論に直接の影響を与えた実存主義（3章）、および解釈学（4章）を紹介する。2章から4章は、異なる種類の現象学的思考の哲学的基礎を詳しく説いたもので、大陸哲学のこの流派が、フッサール現象学と呼ばれるものから実存主義的現象学（しばしば単に実存主義と言う）へ、解釈学的現象学（解釈学的・実存主義的現象学と呼ばれることもある）へとどのように展開したかも示してある。仰々しい響きに困惑するかもしれないが、これらの名称はエドムント・フッサール（現象学の創始者）の本来の哲学のうち、それぞれ、生きられた経験と意味の解釈に焦点を定めたものである。あなたがもし、人々によって生きられた世界、人々のナラティブを——その豊かさ、複雑さ、活気のすべてとともに——理解することに関心があるのなら、現象学の「部族言語」は理解しようと努力するに値する。以下に続く3つの章は、現象学の哲学的核心をなす複雑な用語が、誰の目にも明らかに理解できるよう、説明を試みたものである。この3つの章は、6章から8章で提示した現象学的方法の3つのグループに対応している。6章では、現象学的心理学への記述的アプローチ

に焦点を当てる。これは、2章で提示する現象学の基本に最も即しており、実存主義（3章で取り上げる）のアイデアにも沿っている。続いて7章では、現象学的心理学を实践するうえでより解釈重視の方法を考察する。これらは、3章と4章でそれぞれ提示する、現象学的哲学における実存主義的および解釈学的な転回により緊密に即したものである。8章では、4章で論じる哲学者ポール・リクールの解釈学的現象学から直接的に発展した現象学へのナラティブ・アプローチを紹介する。5章は、2～4章とは大きく異なり、多くの現象学的研究に共通する多様な論点について、実用的な情報を提供する長い章になっている。とりわけ、研究計画、標本抽出、反射性、研究倫理、データ収集についての情報を記してある。最後に9章は、現象学的な観点への批判に対する現象学的な応答を提示すること、また、心理学における質的研究の内部で今日生じている重要な論争の数々に関与すること（そして乗り越えること）を試みたものである。これらの論争のいくつかはきわめて複雑なものであり、1件の現象学的研究を実施することだけに興味がある読者にとって、一部のセクションはさして重要でないように見えるかもしれない。しかし、現象学的心理学に対して向けられる批判、そして、解釈、言語、ポストモダニズム、現象学的心理学の未来にまつわる論争に関心のある読者にとっては、この章に見るべきものが多くあることを願っている。

本書を読むさい、次章以降の3つの章を飛ばして、現象学的研究を行うことの実用性を扱った章へ、さしたる問題なく進むことも十分に可能である。実際、時間が限られていて、現象学的研究の実施方法について早急に情報を得なければならないのなら、続く3つの章を飛ばして、研究プロセスの実用性にただちに焦点を当てることをお勧めしたい。とりわけ、研究計画、標本抽出、データ収集の全般的な詳細は5章に記してあり、データを分析するさまざまな方法は6～8章で得ることができる。ただし、多くの質的方法と同様、哲学に基盤を持つ現象学的心理学にとって、本書をこのように読むのは理想的なやり方ではない。用いられる方法を特徴づける哲学を理解することで、実施される研究は大いに豊かなものになるだろう。それはまた、研究の妥当性や方法論の健全性を確保するのに役立つだろう。こうした点も含めて、実用的な章に進む前に、続く3つの章を読み通すことをお勧めする。後の章を読むさいにこれらの章に立ち戻ることが必要になるかもしれないし、実際、そうするのが望ましい。2～4章で提供される現象学的哲学の最初の基礎知識はさらなる読書にとっての基盤になるだろうし、現象学的心理学についての知識を形成するうえで立派な土台となるだろう。

私が本書において一人称（「私」）を使用し、私自身の見方を提示していることに読者は気づかれたことだろう。主流派心理学の書物の多くが持つ非人称的スタイルへの対比として、またそれに含まれる権威への挑戦として、多くの現象学的心理学者が「私」を使用する。しかも、こうしたより個人的な声の使用は、研究プロセスにおける研究者の重要性が現象学的心理学で認識されていることを反映している。私たちにとって、知識は、歴史、文化、採用されている特定の理論的観点の外側で生み出されるものではない。現象学的心理学者は「真理」を生み出していると主張はしないし、それが可能だとも考えない。それゆえ、あなた——読者——も、アカデミックな「専門家」の知見として信じるのではなく、提示された知見の価値を判定するよう委ねられているのである。

要 約

質的方法は、現象を経験する人々にとってそれが持つ意味の観点から、現象を自然観察的に記述し解釈することに関わる方法である。心理学は量的・認知的観点に支配され続けているものの、この観点への批判は大きくなりつつあるし、質的なオルタナティヴへの関心も増大している。これらのオルタナティヴな見方のひとつが現象学的心理学である。現象学的心理学は、何よりもまず、世界についての人々の生きられた経験を理解すること——「事象そのものへの還帰」——に関心を持つ。ただし、現象学的心理学はひとつではない。むしろ、共通の現象学的哲学に基盤を持つ一群の方法である。以下に続く章は2つに区別される。前半は、現象学的心理学の哲学的基盤を説明することに関わり、後半は、これらの概念を心理学に実際に応用することについて述べている。

2 章 現象学の基礎

【この章の目的】

- 現象学的心理学とは何であることを説明する
- 現象学的哲学の簡単な歴史と、創始者エドムント・フッサールの思想のあらましを述べる
- 現象学的哲学の基本的概念を紹介する
志向性、ノエマーノエシス、エポケー（判断停止）、現象学的還元、想像的変更、本質

この章では、現象学の基本についてその輪郭を示す。とりわけ、この哲学運動の、心理学にとって大切な特徴を簡単に描き出すよう努めたい。まず、「現象学とは何か？」という問いに答える試みから始め、次に、現象学の現代的理解に役に立つよう前後関係を踏まえながら、この運動の歴史についての話に入っていく。その後で、現象学における6つの重要な概念を取り上げ、その実際の応用のための基礎づくりとして役立つよう、明晰かつ簡潔に描写する。だがその前に、心理学における現象学的な研究法の位置づけについてももう少し知ってもらうため、以下のことを論じておきたい。

1章で述べたように、心理学における支配的な研究方法は、量的かつ実証主義的（もしくはポスト実証主義的）アプローチである。このアプローチは、心理学的現象を変数上のスコアに変換するなどしてデータを計量化することを心がける。この方法は、世界についての私たちの知覚と世界そのものの関係にはほとんど問題がない、という前提にもとづいている。このような視点を持って研究している研究者たちは、観察可能な行動であれ「心的状態」であれ、研究対象に関する識別可能な真理が究極的には存在していると考える。この真理に到達するために、結果が従属変数として測定できるよう独立変数を操作する実験を行ったり、態度や信念や行動についての質問紙を考案したりする。このような方法で人間についてのデータを集めることが、人々の頭の中で何が起きているかを語ってくれると、確信しているのである。と言っても、実際にはそんなに簡単に済むわけではない。多くの心理学者が、対象を知覚する人物や知覚

する文脈が違えば、対象は異なる意味になってしまう、という過程があることを認めているからだ。たとえば、海を、楽しかったり心穏やかになったりするもの、明るい日差しのなかでの素晴らしい海辺の休日の思い出を呼び起こすものとして知覚する人もいれば、まさしく同じ海を、制御できない荒れ狂った獣さながら引きずりこんで溺れさせるものとして知覚する人もいるかもしれない。まさに同じ対象が、人が違えば、あるいは同じ人物でも状況や前後の文脈が違えば、まったく異なった事象を意味してしまうのだ（溺れかけるという経験があった前か後かで、静かな海か嵐の海かで、または単にその人の機嫌が良いか悪いかで）。だが、主流の心理学者の間ではそれでもなお、さらにいっそう厳密な方法を適用することで、私たちの心理の秘密を明らかにすることは可能だという根深い信念がある。この見解に異議が唱えられてこなかったわけではない。そしてそのなかでも特に強力で徐々に人気の高まりつつある代案——現象学的心理学——が、言うまでもなく本書の主題である。次の3つの章で明らかになるように、現象学的アプローチは、世界について知りうると考えられていること、それゆえにまた、人間の本性について知りうると考えられていることについて、伝統的な理解とはまるっきり異なる代替案を提供する。現象学的アプローチが、定量的・実証主義的・自然科学的な見方に対立し、他の多くの質的研究の見方と共通している見解には、次のような項目が含まれる。

- ・人間の経験に、それ本来の正当な価値を持つ主題として焦点を当てる
- ・意味に、したがってまた経験から意味が生じる過程に関心を持つ
- ・事態の解釈や因果関係よりも、事態の記述とそのなかの関係性に的を絞る（この区別は次の章でさらに言及し、問題とする）
- ・研究されているテーマが〔研究対象者と研究者によって〕共同構築されるさ
いの研究者の役割を認識する。しかもすべての経験は、（歴史的、文化的、
個人的な）文脈のなかで理解されなければならない。

現象学的心理学の研究例として、研究ボックス 2.1 の男性のレイプの経験に関する例を読んでいただきたい。そこではこの経験の恐怖、そして巻き込まれた人に対して与える意味に、鮮明に息吹が与えられている。始めから終わりまで背景状況に対する感受性を保ちつつ、研究に限界があることを認めつつも、このような犯罪を防ぐのに役立つかもしれないとして、研究者たちはこの経験の構造を明らかにし、犯罪から生還した人たちの回復過程を明らかにしようとしている。これこそが現象学的心理学の目指すところである。すなわち、人間

経験を豊かに記述すること、それにより、繊細かつ多様なしかたで新たに経験を理解すること、そしてこの新しい知識を使って、私たちと他者たちによって生きられる世界に変化をもたらすことである。

◀研究ボックス 2.1▶

非・施設の状態における男性のレイプ被害の経験

Pretorius, H. G. & Hull, R. M. (2005). The experience of male rape in non-institutionalised settings. *Indo-Pacific Journal of Phenomenology*, 5 (2), 1-11.

この論文は、刑務所や軍隊や寄宿舎のような場でもないのにレイプされ生還した3人の男性の経験の研究から得られた結果を報告している。著者たちは記述を中心とする現象学的方法を用い、彼らの経験と、この出来事が人生に及ぼした衝撃について、大変綿密に描写している。彼らは研究参加者との綿密なインタビュー (in-depth interview) を通してデータを集め、レイプの経験と人生に与えた衝撃についての情報を引き出すことに的を絞った。インタビューは一語一句そのままに書き起こされ、記述的現象学的分析を受けた (この分析の方法については5章と6章を参照)。著者たちは彼らの結果を5つのカテゴリーに構造化している。すなわち、予期せぬ暴行、レイプの自己への影響、レイプの経験を打ち明けること、支援機関、そして人生の変化である。これらは当事者の言葉の短い引用で補足しつつ詳細に記述され、そのトピックに関する以前の文献と関連づけられる。研究者たちは、彼らがレイプの「犠牲者」となって、男性であることは何を意味するのかということを再び定義し再構築することが必要となり、彼らの生活がどのようにひっくり返ったかを報告している。生還できたという安堵感と、自分および自分が愛するものが苦しまなければならなかったことに対する怒りの間で、葛藤する感情が生じる。レイプを他の人に打ち明けることはとりわけ問題をともなうが、当事者が前向きになり、レイプとその自分にとっての意味を自分自身の人生に組み入れることを可能にするためには、決定的に重要なことでもある。著者たちは男性の実際に受けたレイプの体験とそれが彼らの生活に及ぼした結果について、次のように鮮明に要約している (pp.8-9)。

「犠牲者にとってレイプの経験は、彼のパーソナルスペース〔訳注：身体の周囲に広がる個人的なわばりのような空間〕への究極的な侵入と侵害をともしない、それは身体的な侵入というだけではなく、もっと深くまで浸透する